

スピノザは唯物主義者か

榮福真穂(京都大学)

本発表の目的は、スピノザの哲学の唯物主義的解釈を再検討することである。発表者の暫定的な答えをあらかじめ示しておくならば、「スピノザは唯物主義者ではない」ということになる。以下では、問題の背景を概観したのち、本発表の問題関心をより絞り込んだ仕方提示しよう。

スピノザの哲学は、長らく唯物主義(materialism)の立場であると解釈されてきた。セヴェラックによれば、18世紀においては(ディドロらの)唯物主義思想において、19世紀から20世紀にかけてはマルクス主義思想においてスピノザは受容された(Séverac, P., 2019)。後者の流れのなかで、たとえば心理学者ヴィゴツキはスピノザの感情論に着想を得て「弁証法的」心理学を試みたのであり、アルチュセールはスピノザ主義から出発し、「偶然の唯物論」へと発展させた(セヴェラックはアルチュセールの「我々はかつてスピノザ主義者だった」という言葉を引いている)。このアルチュセールの元からは、マシュレやバリバルといった著名なスピノザ研究者が輩出されることになる。

セヴェラックによる描写はフランスにおける受容史に焦点が合わせられたものであろうが、ここで捨象されているドイツ観念論における受容もまた、言わずもがな重要である。よく知られているように、シェリングはいわゆる『自由論』の序論においてファイヒテを観念論の極へ置き、スピノザを實在論の極として対置した。平尾の言うように、そこでのシェリングによるスピノザ批判が「すべてを物体とみなす一面的=實在論的体系」への批判である(平尾昌宏, 2009)とするなら、ここで「實在論」と呼ばれているものは「唯物論」と呼び替えても差し支えないものであろう。スピノザの實在論的・唯物論的側面は、彼ら自身の「観念論」によって克服されるべき「反対の極」だったのである。

こうしたマルクス主義やドイツ観念論の流れとは別系譜であろうが、現代の英米系の解釈者たちにも唯物主義的な傾向が認められる。たとえばロードによる入門書においては端的に、「スピノザは通常、合理主義者かつ唯物論者だと考えられている」と言われている(Lord, B., 2010)。代表的な例を挙げてみるならば、カーリーやベネットの平行論解釈にその傾向を確認することができよう。カーリーは当該箇所において、「心的イベントと脳のイベントを同一視する」最近の見解にスピノザを引きつけて解釈することで、スピノザ哲学は「より魅力的でもっともらしく」と述べている。彼らにおける平行論解釈といわゆる「観念説(theory of ideas)」解釈の内実、それらとの関係において唯物主義的スピノザ解釈を再検討するのが本発表の主要な内容となる。この点については後述しよう。

以上のような歴史的背景を踏まえ、本発表ではスピノザそのものに立ち返り、彼の哲学が唯物主義と言えるかを内在的に検討してみたい。だが詳しい内容に入る前に、本発表において「唯物主義」という用語が何を意味するものであるのかを画定しておく必要があるだろう。セヴェラックは「唯物主義」を3つの領域に区分する。すなわち、経験的唯物主義、存在論的唯物主義、方法的唯物主義である。経験的唯物主義とは、人が生きていく中で物質的な善や身体的快樂の享受にもっとも価値を置く態度のことを指す。次に存在論的唯物主義は、思惟や反省といった精神的要素を最終的には脳における神経接続などの物質的運動に還元してしまう立場である。最後に方法的唯物主義とは、物質

的事物についての探求とまさしく同じ方法で精神的的事物についての探求を行おうとする態度を指す。

セヴェラックはこの方法的唯物主義において、スピノザを唯物主義者だと言うことができると考えているが、本発表はその是非を論じるよりも、2番目の存在論的唯物主義の観点からスピノザ哲学を唯物主義と判定することができるかを検討したい。まず、「物質的事物だけが実在するのか」という存在論的唯物主義の観点からの問いは、「精神的的事物は実在しないのか」という問いへと置き換えることができる。これにより、『エチカ』においては思惟属性の様態がこの精神的的事物にあたるが、思惟属性のあらゆる様態はつきつめれば観念に他ならない。本発表ではまず、スピノザが観念の実在に言及していると思われる『知性改善論』33,34節および、その議論を引き継いでさらに展開させた『エチカ』第2部定理7備考において、観念が「実在的なあるもの」と言われ、また現実的な因果関係を形成するものとして提示されていることを確認する。また、こうした観念の実在性・現実性は、平行論における各属性の存在論的な同等性を強調する解釈によっても補強されることができる。第2部定理5から7備考にかけて行われているのは、1)各属性内での諸様態による系列の徹底的な因果的独立と、2)それらが実体ないし自然において同一であることの証明である。この前者においてとりわけ強調されていたのが観念の「形相的有」である。両著作に共通して用いられる「形相的」という語から、各属性の存在論的同等性を裏付けることができるだろう。

さて、カーリーやベネットと発表者とを分けるものは、こうした観念の実在に関する見解および平行論解釈にあるように思われる。というのも、カーリーは観念を、物質的宇宙を正確に記述する「命題」とみなすことで、「実在的なあるもの」としてのあり方を捨象しているからである。また彼は、第2部定理7における「形相的」な系列と「想念的」な系列との平行論を、単純に思惟属性と延長属性との平行論と同一視している。ベネットはこれを受け、カーリーが〈命題-事実〉の平行論と考えていたものを〈命題-物体〉の平行論へと修正する。これにより、世界すなわち物質的宇宙=延長と、それを記述する命題=思惟との間の存在論的なヒエラルキーがより明瞭になる。この存在論的ヒエラルキーは、たしかに第2部定理7の(形相的-想念的)平行関係の間では認められうるものである。しかし、〈物体-観念〉平行論と(形相的-想念的)平行論を同一視してしまうならば、そこで同時に観念の「形相的有」が強調されていたという事実をどう理解すればよいかかわらなくなる(これはゲルーが「思惟内平行論」「思惟外平行論」という二種類の平行論を提示したこととも関わる)。このように、存在論的唯物主義としてのスピノザ解釈は、平行論解釈、観念説解釈と結びついて成立している。この後者の2つにおける誤りを指摘することを通じ、唯物主義的スピノザ解釈の不可能性を示すことが、本発表の具体的な目的となる。

参考文献

- Bennett, J., *A study of Spinoza's Ethics*, 1984, Cambridge University Press.
- Curley, E., *Spinoza's Metaphysics*, 1969, Harvard University Press.
- Guérout, M., *Spinoza II-L'âme*, 1974, Aubier-Montaigne.
- Séverac, P., *Qu'y a-t-il de matérialiste chez Spinoza ?*, 2019, HDiffusion.